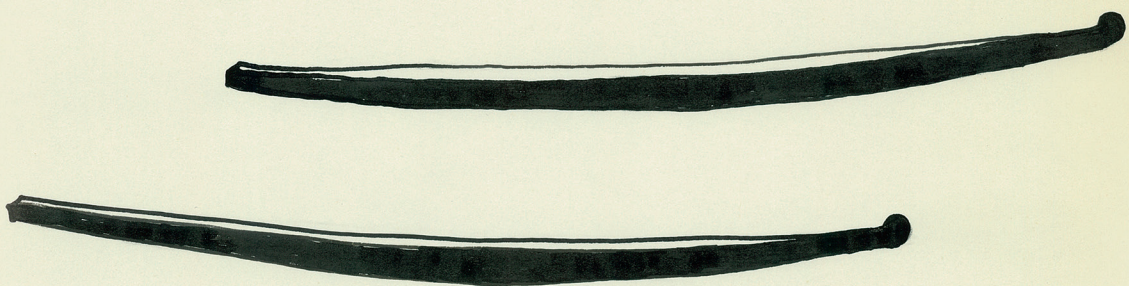


五十嵐靖晃 海渡り

IGARASHI Yasuaki

“Umieatari”



津奈木町のアートによる町づくりは、水俣病からの地域再生と文化的空間の創造を目的として1984年に始まりました。アーティストの五十嵐靖晃を招聘し、津奈木町を構成する人、物、歴史、文化などさまざまな要素をアートでつなぎ、地域に根ざした新たな文化的活動を生み出そうと2018年に始まったのがアートプロジェクト「つなぎまちのつなぎかた」です。五十嵐は、3年にわたるフィールドワークの結果、海沿いの集落に密やかに伝わる「弁天様のお祭り」を人々との協働によって持続可能な現代アート作品として再構築した《海渡り》を2021年秋に生み出しました。

「弁天様のお祭り」は、潮の満ち引きと関係のある旧暦によって執り行われるため、年によって《海渡り》の日も変わります。2回目となる今年は、当日に向けて地域の伝統や暮らしに根ざした新たなアイデアも出されました。残念ながら当日は天気が下り坂だったため、安全を考慮し新たなアイデアの実施は翌年へと持ち越されることになりましたが、地域内外から多くの老若男女が参加しました。昨年も参加した大人たちは慣れた手付きで今年初めて参加する人々に糸を張る手順を教え、ひとまわり大きくなった子どもたちは助け合いながら、陸と島の間を何度も往復しました。民間信仰にアートが接続して生まれた《海渡り》は、歴史と伝統を大切にしながらもアーティストと人々の協働によって地域の暮らしとともに変化しながら後世へ受け継がれてゆきます。

つなぎ美術館(津奈木町)

令和4年《海渡り》スケジュール

① 海渡りの日	9月23日(祝) 10:30~17:00
《海渡り》作品公開	9月24日(土)~10月15日(土)
② 組紐ワークショップ	10月7日(金) 10:00~14:00
③ 糸あげの日	10月16日(日) 15:00~17:00
④ 弁天様のお祭り	10月21日(金)*旧暦9月26日 11:00~13:00

会場 旧赤崎小学校付近(熊本県葦北郡津奈木町福浜165番地)





① 海渡りの日

2022年9月23日(祝) 10:30~17:00

2回目となる今年は、海風が吹く中での開催となりました。「一本目!」のかけ声とともに糸を引くと、陸側の結び目が千切れて飛んでしまいました。急遽、糸の扱いに長けた大工や漁師によって新たな結び方が考案されました。結び目が無事に繋がると、待ちわびた子供たちは糸巻きを持って、陸と島の間を何度も往復していきます。この日、最も多くの糸を張った人を先頭にして、最後の一本が島側の結び手へと渡されると、糸張りは終了。その後予定していた競り舟の乗船体験は、風が強く波も高くなったため、来年へと持ち越されることになりました。

「競り舟も作品の一部になってる」

しんだて
新立 誠さん 津奈木海龍

二年目は一年目よりも良くしようと思って臨みました。糸が千切れたのは、もっと美しく見せたいという気持ちで目いっぱい糸を引いたからかもしれません。ハプニングはありましたが、次に繋がるいい経験でした。今年は競り舟の乗船体験はできませんでしたが、準備を進めてきた人達や乗船したいと来てくれた人との繋がりを強く感じました。競り舟は作品の一部でもあり、《海渡り》の糸は競り舟と人を繋いでくれているようにも思います。







② 組紐くみひもワークショップ

2022年10月7日(金) 10:00~14:00

今年から、津奈木小学校と連携して《海渡り》による地域学習が始まりました。3年生、約40名はグループに分かれ、組紐ワークショップ、風景スケッチ、磯遊び、柳幸典作品《入魂の宿》の鑑賞を行いました。参加した児童たちは、事前にレクチャーを受けた保護者に作り方を教わりながらプレスレットほどの長さの組紐を組み、腕に巻いて見せていました。この日、子供たちは磯でピナ貝やカニを見つけ、感じたままに風景を描き、糸に触れることで作品の世界を体感しました。今後、多くの人と協働で《海渡り》の糸を組紐に作り替えていくという新たな目標ができました。

門崎 つむぎ 紬希さん 小学生

組紐の順番を覚えるのが難しかったけど、思ったより上手にできて嬉しかったです。出来上がった組紐を友達と見せ合いっこしたのも楽しかったです。海が青くてきれいで、シーグラスを拾ったり、岩場の穴にきれいな魚を見つけたり、海辺で食べるお弁当がとても美味しかったです。

門崎 祥子さん 紬希さんのお母さん

一本一本の糸を丁寧に組んでいく工程が、娘に名前をつけた時の想いと重なってみえました。この先、《海渡り》に関わる人たちの想いが組紐のように繋がれて、何十年、何百年と津奈木の景色を彩るものになってほしいです。





③ 糸あげの日

2022年10月16日(日) 15:00~17:00

潮の満ち引きの時間や干満の差は、月の朔望(満ち欠け)によって変化します。潮の動きが緩やかだった中潮の最終日となるこの日。予定の時間になっても潮が引かず、しばらく海を眺めた後、ようやく潮が引き、道がうっすらと現れ始めると、参加した人々は待ちきれない様子で落ちている石で足場をつくり、島へと渡って行きました。糸が海水で濡れないように、皆で支えながら1本ずつ丁寧に巻きあげ、すべての糸をあげた頃には辺りは真っ暗に。小雨も降り始めていましたが、海龍のメンバーを中心とした男性たちは柱を抱えて島へと渡り、無事に鳥居を建てることができました。

「これは神事やから、やりきらんといかん」

新立 伸哉さん 釣り船漁師

潮には夏潮と冬潮があって、10月頃に冬潮に入れ替わると、昼から夜にかけての干満差が特に少なくなります。暗くなり始めて潮も満ちてきていましたが、鳥居を建てるというのは神事ですからその日にやらなければいけないと思いました。やるときめたことはやりきる、それが海に生きる人たちの性格でもあり漁師根性でもあります。あとは鳥居を建てる経験なんて一生ないので、一番大きい柱を一人で担いで運ばせてもらいました。





④ 弁天様のお祭り

2022年10月21日(金)*旧暦9月26日 11:00~13:00

弁天様のお祭りを多くの人と共有して4回目となります。島へ渡り、新たに寄進者と「海渡り一同」の文字が書かれた鳥居のぼりに幟ほこらを立てました。島の頂上へ登り、祠を綺麗にして、料理や果物、地元酒蔵の亀萬酒造から献上された御神酒おみきをお供えしました。皆で手を合わせ、これまでの一年に感謝し、新たな一年の無事と平安を祈願します。直会なおらいでは、地域の女性たちが作った昔からの祭りには欠かせない赤飯や煮しめ、果物や、赤崎の郷土料理の「ひろす」などが並び、御神酒をいただきながら地域のこれまでの暮らしや未来について語り合いました。

「豆腐はしっかりすって、粘りば出さんとおいしゅうなか」

岩崎 美津子、千々岩 尚子ちちいわさん 赤崎のお母さん

昔は赤崎地域の婦人会があって結婚式や葬儀など冠婚葬祭の料理を作っていました。私は20代の頃に赤崎に嫁いできて、婦人会に入って地域の料理や味付けを教わりました。“ひろす”は法事で食べる精進料理で、豆腐をすって、味付けしたごぼう、ひじきと合わせた赤崎の郷土料理でもあります。豆腐をするのは若い人の役割で、きつくても、しっかりすらんと叱られるので嫌でしたが、手間暇がかかる分、美味しいご馳走でした。



つなぎまちにつながる

川浪千鶴(インディペンデント・キュレーター)

「地域アート」といえば、地域を舞台にしたアート・プロジェクト全般を指す言葉だが、観光などの経済効果を期待した町おこし的手段、といった批判的な使われ方も近年は多い。地域とアート・プロジェクトをめぐる思惑は交錯しながら、現在も全国各地でさまざまな取り組みが続いている。

そうしたなか、津奈木町立のつなぎ美術館が行うアート・プロジェクトは、海と山に囲まれた人口約4500人が暮らす小さな町の地域性を活かした仕組みと実践で、地域アートの意義に一石を投じている。

つなぎ美術館のミッション(使命)は、「水俣病からの地域再生と魅力ある文化的空間の創造」である。同館はそこから「地域資源の再評価と人材育成」を活動の目標に定め、2013年から3年計画で行った「赤崎水曜日郵便局」以降、現代美術家による「住民参画型アート・プロジェクト」を継続的に開催している。

住民参画という言葉には、アートの本質を関係性と捉えていることが窺える。アートを介して、観光誘致ではなくコミュニティを育むというパーソン・センタードな、町民本位の姿勢がしっかりと伝わってくる。五十嵐靖晃がプロジェクトを「つなぎまちのつなぎかた」と名付けたことにも、誰が誰のために、何のために行うのかといった根本的な問いの存在を感じさせられた。

つなぎかたとは言っても、五十嵐はつながりを新たにつくることを最初から想定してはいない。地域の歴史や先祖から受け継いだ営み、自然とのかかわりは、目に見えずとも、たとえ日々の生活の中で忘れかけていたとしても、いまここに暮らす人々の中に確かに在るのだから。つながりは「すでに在る」と呟いてみれば、松田テル子さんと彼女が長年ひとりで守ってきた弁天祭りとの出会いは、偶然ではあるが必然だったとわかる。

五十嵐の役割は、仲介もしくは触媒といえるだろう。土地に根ざした、地域で継続できるプロジェクトという美術館の要望を受け、年月をかけて活動した結果、「土地に納めるもの」ができた映像記録の中で語っていた言葉が印象に残っている。つなぎかたを探る過程で、長期プロジェクトという旅の仲間は増えていき、最初はアーティストを手伝っていたはずの町民たちが次第に当事性を深め、最終的には自分事として行動するようになっていったという。忘れていたつながりを思い出し、取り戻したつながりを土地に納めたのは町民自身だった。《海渡り》はそのようにして、かたちづくられていったのだ。

「海渡りの日」に出現したのは、海岸と弁天島をつなぐ102本の美しい赤い糸。町民だけでなく私のような外からの参加者も交えた大勢で陸と島を何回も往復して張った糸は、潮が引いた海を渡り、祠につながる島の細道を通い、地域の平安を祈り続けた松田さんの営みを共有し、思いを受け継いだ記録であり、秋晴れの海辺での不思議な協働作業を、いまここで出会った人々が共に楽しんだ記憶でもあった。

楠本学芸員は、神職だけで執り行う「祭り」と観客が外部から加わる「祭礼」との民俗学的な区分をもとに、《海渡り》を分析している*。閉じた弁天祭りから開かれた海渡りへの変容は、地域におけるアート・プロジェクトの役割と可能性として、とても興味深い。

昨年入院が長引いた私は、2回目の「海渡りの日」に福岡から駆けつけることができなかった。ところが後日美術館スタッフに、あの日あなたもそこにいた気がすると言われて、笑いながらもどこか神妙な心持ちになった。そこが自分を迎えてくれる場所、何度でも選んでいる場所と感ずることができれば、地縁のない来訪者であっても、地域文化のつなぎ手に加わることは可能なかもしれない。

津奈木町がおこした小さな波紋、その広がりをこれからも見守っていきたい。

*楠本智郎「伝統を紡ぎ未来を開く—美術からの新たな提案—」記録集『五十嵐靖晃 海渡り』津奈木町・つなぎ美術館、2022年

海の息吹に触れる

五十嵐靖晃

2回目となった今年。新たに加わった要素は、競り舟の乗船体験、組紐ワークショップ、亀萬酒造の御神酒、地元の伝統料理ひろす。その多くは土地の文化を代表するものですが、これらを新たな仲間が増える入り口として機能させたいという狙いがありました。なぜなら、《海渡り》を土地の魅力を再発見し、それをみんなで楽しむ機会にしていきたいからです。そこには当然地元の力が必要であり、また、見落とされている物事に光を当てるには、外から来た人のまなざしも必要となります。交流を通じて見出される発見と感動は、関わった当事者によって自ずと語られ広がっていきます。来年は競舟に乗ってみたいなあ、またあの人と酒飲んでひろす食べたいなあなど、「あの海であの時間を過ごしたい」そんな思いが集まる場所にしていきたいと思っています。やがて、それぞれに違う「津奈木愛」がある人が1人ずつ増えていき、楽しみ方もその分増えていくのがこれからの理想です。

私自身の発見としては、「音」と「天気」がありました。「天気」に関しては、全て上手くいった1回目が数年に一度の奇跡の年だったのだと、今年あまり恵まれなかったが故に理解しました。《海渡り》は潮や天気など様々な自然の影響を受けます。当然、それらは人の都合でどうにかなるものではありません。でも、そこにこそ自然と向き合う真の豊かさがあります。回を重ね、「あの年は雨が降って暗くなっていく中で鳥居を建てたね」とか「今年は潮も波も天気も最高の年になりそうだね」とか、一度として同じ瞬間が訪れることはない「その年の《海渡り》」を一喜一憂しながらみんなで共有していくことが、同じ時代にこの星で生きている楽しみになっていくのだと思います。

そして私は「《海渡り》の音」を聞きました。キンキンに張られた102本の糸が風で震動し、それが重なりあって倍音となり独特の音を発していたのです。ある音楽家の方は《海渡り》を見て「まるで巨大な弦楽器みたいだ」と言っていました。あんな音が出るなんて!やってみたら出会えた大発見です。糸を張るときは、100kgのベンチプレスを持ち上げる屈強な男衆が力一杯、まさに風と綱引きをして張っています。「《海渡り》の音」は、条件が揃えばそのままでも聞こえますが、シェルターの柱に耳を当てるとよりクリアに聞こえます。さらに弁天島に渡って糸にそっと手を当てると、驚くほどの振動を感じることが出来ます。それはまるで、この海の息吹に直接接触するような体験です。

天気が良い時もあれば悪い時もある、音が聞こえる時もあれば聞こえない時もある。でも、そのどちらも奇跡的な瞬間なのだ《海渡り》は気付かせてくれます。

プロジェクト名：つなぎまちのつなぎかた

作品名：海渡り

期間：2018年4月～

主催：津奈木町、つなぎ美術館

企画・構成：楠本智郎（つなぎ美術館）、濱田真大（津奈木町役場）

記録集

編集：楠本智郎、濱田真大、三迫太郎

執筆：川浪千鶴、五十嵐靖晃、楠本智郎、濱田真大

デザイン、写真：三迫太郎

ドローイング：五十嵐靖晃

発行：津奈木町、つなぎ美術館

2023年3月 初版第1刷発行